

に立ってやってくれたとのこと。

七月、帰国のためヤクディニヤ收容所を出る。八月、ナホトカ港の收容所に入る。昭和二十三年八月二十二日、ナホトカ港を出発。栄豊丸に乗って八月二十四日舞鶴港に上陸、復員する。八月二十六日、家に電報を打つ。八月二十八日、立川の実家に帰る。立川駅に着くまで、家があるのかわからなかった。また父母兄弟が丈夫かも何もわからなかった。皆、丈夫、元気で迎えてくれて安心した。

シベリア抑留記

新潟県 田 中文 平

終戦時は、北朝鮮三十八度線以北の元山海軍航空隊に戦務いたしておりました。終戦の詔勅は聞こえておらず、翌朝、当直将校が、「日本は昨日一時停戦となった、志願兵は居残って残務整理、その他の兵は即時解散、各自の故郷へ帰るように」と報告。兵隊は真相

がさっぱり分からず隊内は動揺していた。

二十二日早朝、見張りの兵が海に軍艦が多数見えると報告、最初はアメリカの軍艦が艦砲射撃に來たと思ひ、各陣地に戦闘準備が発せられた。機銃に弾を込めて臨戦態勢に入った。しばらく待機したら、軍艦より上陸用舟艇五、六隻、波をけたてて港に向かつてくる。先頭の船には赤旗と白旗を立てて軍使らしき将校数名、武装解除の打ち合わせに來たのだ。

翌日、飛行場へ武器弾薬全部並べてソ連軍の武装解除を受ける。やっと戦争に負けたのだという実感でひしひしと胸にこたえた。

以後、ソ連抑留者としての運命を辿る。航空隊に一週間ぐらい監禁生活、日本より迎えの船が來たので出発とのこと。内地は敗戦のため、食料も衣服もないので、みんな持てるだけ持つようにと隊の倉庫を解放、各自背に背囊、両手には持てるだけ欲張って、やっと歩くような姿で航空隊を後にした。

さて、いくら歩いても港が見えてこない。これは変だとソ連の番兵に聞くと、船はもう一つ向こうの港に

待っていると言う。そのうちに持った荷物が重くて、少しずつ捨てざるを得ません。疲労困憊、身を軽くして歩かなければならず少しずつ捨てた。捨てた品物を朝鮮人が拾いながら後からついてくるではありませんか。とうとう朝鮮半島北端の興南の港まで歩かされた。港には確かに船が待っていました。よく見ると日本の船ではなく、ソ連の貨物船でした。迎える船としては変です。甲板には各地より没収した戦利品（食料、機械類）がいっぱい積んであります。ソ連兵が昼間、ヤポンスキー東京ダモイ（お前達は日本へ帰るんだ）と言った言葉が信用できなくなりました。

今にも降り出しそうな暗い空、船の左舷を見ると朝鮮の山の稜線がいつまでも見えるではありませんか。船は日本海へ進まず、沿岸ばかり北に向かって進航しています。何時間航行したのか、時計はソ連兵に取られ、まるで時間が分からない。興南の港を出航、丸一日、外はもう暗くなり夜となった。港に入ってゆく様子、どこの港か見当がつかない。翌朝外を見ると、軍艦や駆逐艦、潜水艦などがびっしり停泊している。こ

れは軍港だ。戦友が、ここはウラジオストックだ、ロシアは秘密の国、鉄のカーテンの国、我々に軍港を見せたのだから、ひよつとすると山の中へ連れてゆき銃殺かもしれない、と囁いていた。

夜明けを待ってまた出航、二日目に着いた所はナホトカ（後で内地引揚げの港）であった。そこで下船させられ「ダワイダワイ（行け行け）」とせき立てられて野宿しながらの行軍、皆空腹と疲労とでふらふら人の後を追う。夜になるとシベリアの空気は寒い、毛布を頭からかぶってとぼとぼ歩いた。

大分奥地に入った様子、着いた所は山に囲まれたラーゲル（収容所）、有刺鉄線が二重に張りめぐらされ、四隅には機銃を据えた見張台、常時ソ連兵が監視している。日本の捕虜を入れるために準備したのかと聞くと、いや、これはゲルマンスキー（ドイツ人）を入れるために造ったのがちやうどお前たちに間に合ったと言っていた。我々の収容所はバラック建てで屋根はシート張り、小屋の周りに土を積んで風除けとしたお粗末なもの、中にトロツコを伏せたようなストープが置

かれてある。電灯がない、水道がない。薪は山から取ってこなくてはならない。翌日から我々の原始生活が始まった。

まず、マッチがない。火を焚くには大変だ、火打ち石にて綿のようなものに火花を落とし、ふうふう吹いて煙が出たら一安心。燃えやすい物に点火する。電灯の代用は、山から松の木の松やにのところを小さなこつぱに割って火をつけ、次から次と絶え間なく燃やして明かりにする。まるで何百年も時代が逆行したような錯覚を感じる。朝起きて点呼のとき、顔は油煙で真っ黒で、涙の目をこすった跡が眼鏡猿のような顔で、みんな見合つて大笑いしたものです。

収容所に入つた翌日から早速作業に駆り出され道路工事に従事、あたりの山にはまだ人の登つたことのない原生林が連なっている。

我々に伐採させるためには、まず山に登る道を作らなければならない。ツルハシとスコップだけの道具で作業が始まった。十一月ごろには地面が凍つてツルハシを受けつけない。カチカチに表土が凍つて仕事にな

らない。山から雑草を採つてきて積み上げ、燃やして水を溶かす。作業は一向に進まない。ソ連人の監督は怒鳴るばかり。最初は私たちも悪かった。ソ連のノルマ主義が分からず、何も敵国へ来てまで仕事などするものか、我々には関係ネーやとサボっていた。空腹もあり、動くとなお腹がすくのであるべく動かない。

監督は、終業近くなると今日の作業量を計算し、何パーセントの労働と帳面に書き込む。二、三日して収容所長より、君たちは自分の食料は自分たちの労働のいかんにより配給を受ける、今までの働きでは食料はやれぬと、まさに「働かざる者食うべからず」の国である。毎日の食事はひどいもので、黒パン少々、エンバク、コーリヤン、大豆粉など、動物の餌同様、それを混合したお粥一杯だけ、これで働けとは無理なことで皆ばやきながらの作業であつた。体力も落ち栄養失調で倒れる者続出、夕方うす暗くなると鳥目で目が見えなくなる者、ビタミン不足でけがをすると血が止まらない者など、半病人同様な者が沢山出てきた。軍医の計らいで山より松の葉や山ぶどうの葉などを取り寄

せ煎じて飲ませ、いろいろ方法を講じたのだが、最後には働ける者が半数に減ってしまった。山に登る道が出来ると、今度はいよいよ伐採の仕事だ。冬の厳しい寒さ、零下三〇度の冬山の作業は大変だ。粉雪が風に舞い、目も口も開けられない。火を焚けば番兵が火をけちらし「ラポート、ラポート」（仕事、仕事）と銃を向ける。

最初はソ連兵も日本人を警戒しピリピリしていた。作業のときは常時銃を持った番兵が見張り、十メートル間隔ぐらいに機銃を据えて我々を監視、用便を足すにも番兵に報告、指示した場所に済まさなければならぬ。

二年目ころからだんだん慣れてきて、日本人の気質もわかり、私たちに銃を預けて遊んでいる番兵もいた。入ソ一年目が最も犠牲者が多く出た。防寒被服が少なかったことと食料が不足、栄養失調で体力を消耗し、冬に入ってから異常な寒さに死亡者続出。冬の埋葬がまた大変。穴掘り要員五、六人でツルハシ、スコップを持って山に登り、適当な場所を選び、まず枯木や草

を積み上げて火を焚いて地面を暖めて掘る。また積んで燃やす。夕方までに三尺ぐらい掘り下げる。帰りにはその穴に薪を積んで火をつけて帰る。二日目でやつと六尺ぐらい掘って埋葬。穴が浅いと、夏に野犬やオオカミにより掘り返されて骨が散在するので、なるべく深い穴にする。

春は遅い。六月、七月には野原の草花が一齐に咲き、見事であった。夏は暖かく裸で作業する期間もある。山には蚊やブヨがいて、いつも火を焚いて煙で追い払って作業していた。

秋になって移動、スーチャンと言う炭鉱の町へ着いた。山の中のラーゲルより建物も良く、石炭が沢山あるので暖房には不自由なし。電灯もあり、水道もあり、炭鉱の町は景気が良さそうだ。今度は石炭掘りで坑内の仕事をさせられる。炭鉱の仕事はノルマが良いので、パンの量も増し給与も大分良くなった。

私たちも最初坑内に入ったときは仕事にはならないのだ。腰にバッテリーを結び、炭坑帽の先に電球を取り付け、姿は一人前の坑夫なのだが仕事どころではな

いのだ。体がだるく歩くのがやっと。使う方も心得ていて二日ぐらいは作業はさせない。坑内見学、坑道の道順や石炭運搬の様子を見せ、まずは坑内に体を慣らすのだ。縦穴、横穴、坑道は二層、三層と幾層にも掘り下げられてある、古い坑道には絶対入らぬよう注意を受ける、落岩すると危険であるから。石炭は良質で埋蔵量も豊富であった。原始的採掘方法ではあるが、町全体、石炭で潤っているようだ。

ソ連政府は戦後復興五カ年計画を遂行中で、我々日本人抑留者もその戦力として組み込まれていたのだ。石炭が産業を動かすエネルギーとして貴重な時代である。我々も労働力として貢献させられたのだ。交代の時間になると、エアを地下に送る太いパイプが「カンカン」と鳴る。上で合図をしてくれる。梯子を幾つも這い上がって地上に出る。仕事の疲れと空腹のため梯子を登るのが一番大変であった。坑内は冬は暖かく夏は涼しく感じる。冬の零下三〇度以上の寒季は、坑内より一步外へ出ると瞬間、濡れた衣服が凍って鎧を着た人形のようにカチカチに凍る。歩くとカパカパと音

を立てる。風呂場まで行き、風呂場の蒸気でしばし溶かしてから炭坑服を脱ぐ。日本式の風呂ではなく、湯を桶にとって体を洗う。適当に洗って早く着物を着ないと風邪をひく。作業が終わり坑内より出るとき、みんなで良い石炭を一個ずつ持って上がる。それが自分たちのラーゲルの燃料になる。二部屋の真ん中にペーチカがあり、一つのペーチカで二部屋暖房ができる。さすが石炭の町、部屋に入れば暖かく毛布一枚で寝られる。

寒い冬が過ぎ春を迎えると、やっと一年生き延びたという実感がわいてくる。

祖国へ帰る望みの一念で、戦友互いに励まし合いながら、昭和二十三年七月十五日、やっと復員することができました。